

書名：カティアが歩いた道

(「ヴェネツィアの宿」所収 pp.182-200)

著者：須賀敦子

出版社：白水社

出版年月：2001年10月

総ページ数：19ページ

ISBN：9784560073544



推薦者

乾 信之

鳴門教育大学大学院教授

生活・健康系コース

(保健体育)

鳴門に帰ってきてから四半世紀の間に (1) 加藤幸子「苺畑よ永遠に」新潮社 1993 (2) 田中澄江「夫の始末」講談社 1995 (3) 須賀敦子「ヴェネツィアの宿」が印象に残っており、いまだに時々読み返す。(1)は北大の山スキー部での活動や農学部卒業実験である苺栽培が描かれている。(2)は純粋な劇作家の夫や難病の子どもを抱えて映画・テレビのシナリオを作り、大車輪で家族を養う明治女の一代記である。ちなみに田中澄江の夫である劇作家田中千禾夫、(1)の加藤幸子の叔父の劇作家加藤道夫、その妻の女優加藤治子は新劇の仲間である。(1)の加藤幸子は高校生の時、同居していた叔父の自殺に遭遇する。(3)は長らくヨーロッパですごし、日本文学をイタリア語に翻訳していた著者による、自己の記憶を基にフィクションを内在した独創的随筆である。

いずれも自伝的色彩が濃く、(1)(3)は戦後の札幌とヨーロッパでこれからの生き方を模索する20代の激しさを秘めたひたむきな姿が描かれており、(1)は大学1・2年生に読んで欲しい内容になっている。しかし、(1)(2)は入手困難であるので、(3)を紹介する。須賀さんが60歳を過ぎて初めて書いた随筆「ミラノ霧の風景」でいくつかの文学賞を受けた後、新聞の文化の欄に随筆が掲載され、これはすごい文章だなあと感じていると、あっという間に読書好きの間で話題になり、全集ができるほどの文章を残し、10年足らずで世を去った。まさに“命を削って書く”典型のような生き方である。

1950年代にパリに留学した須賀はわずかの間学生寮で40歳近いカティアと同室になった。カティアはドイツ・アーヘンの中学校の教師をやめてパリに来ていた。彼女は南フランスである運動のグループに参加するつもりだが、その前にパリに滞在し、宗教や哲学に自分がどう関わるかを考えるために、終日部屋にこもってフッサールの助手をしていたシュタインの著作集を読んでいた。須賀はそんな彼女に夏休みのイタリア行きを伝えると、カティアは須賀に初歩のイタリア語を手ほどきし、イタリアの留学先を紹介してくれた。夏休みに須賀がイタリアからパリに戻ると、カティアはすでに南フランスに行き、それっきり須賀はカティアと長く音信が途絶えた。30年後、東京の大学でイタリア文学を教えた須賀はカティアと再会を果たした。カティアは南フランスのミッションのグループから派遣され、フィリピンの山村の学校長になり、ある国際機関に招かれて来日したのである。この随筆のラストシーンでは「透明な蜜を流したような四月の夕方 (p.199)」に桜の満開が過ぎた市ヶ谷の土手で二人が言葉少なに再会する。“書くひと”になった須賀はカティアの生き方とかなり異なるが、いちずな人生を歩んできたことはお互いに共通し、無言のうちに理解し合ったのだろう。この余韻たっぷりのラストシーンは映画でもみてみたいと思ひ、自分勝手にキャスティングして楽しんでいる。

